

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座特任准教授
医師・医学博士 狭間 研至

第26回 少子高齢化において果たすべき重要な役割とは

地域医療における薬物治療の質を担保する上で重要となる3つの問題を解決しよう

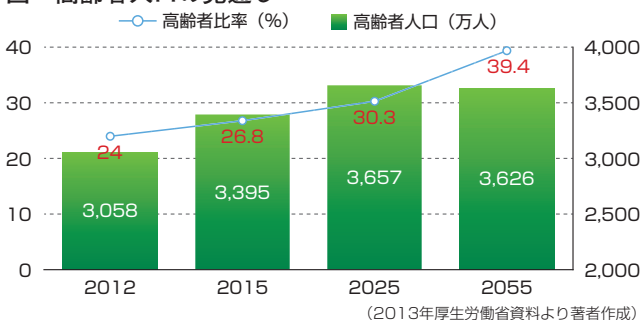
公的保険で医療のすべてをまかなうことは困難
OTC 医薬品服薬後のフォローも大切

薬剤師でない私がこれまでの個人的な体験の中から感じたのは「薬剤師が変われば地域医療が変わる」ということです。これからの地域医療、特に地域包括ケアシステムと呼ばれる在り方の中で、薬剤師が重要な役割を果たさないはずがないと考えています。

わが国の疾病構造を考えると、国民の多くはその人生の後半時期において、薬物治療を受けながら医療機関以外の場所で療養する可能性が高くなることが予想されます。高齢化が進むと、以下の3つの問題が、薬物治療の質を担保する上で極めて重要になってきます。

1)用法・用量・剤形を一般の成人より工夫する必要がある、2)認知機能、身体機能の低下によりコンプライアンスが保ちづらくなる、3)多剤併用も起こりやすいため有害事象が発生しやすい。これらを解決するためには、薬剤師が服薬後の状況をフォローして、患者さんの状態とともに、お薬(=薬剤師が調剤したお薬)はきちんと服用されているか、効果は発現しているか、副作用は見られていないかということをチェックすることが大切です。その際に「医薬品の適正使用」「医療安全の確保」の観点から問題があると考えた患者さんには、薬学的知見に基づいて指導を行い、一連の薬学的評価や今後の対応策を医師に伝えて、次回の処方によりよいモノにすることが重要になるはずです。

図 高齢者人口の見通し



高齢化とともに、少子化が進行することの問題は、社会保障制度の持続性にも関わってきます。厚生労働省の統計によれば、高齢者人口は2040年ごろにピークを迎え、その後は減少に転じます(図)。今はうなぎ登りの高齢者医療費も、前年割れする時代が来るでしょう。しかし、少子化の結果、高齢者比率は2050年に向けてさらに増大します。こうなると、若い世代が少しずつ保険料を負担し、高齢者を支えるという今の健康保険制度の大前提は、根本的に維持することが難しくなります。

これを身近な問題として考えると、国民が受けているすべての医療を、国民皆保険制度でまかなうことが困難になります。この解決策としては、おそらくOTC 医薬品をどう使うかということになるでしょう。OTC 医薬品に成分が移行された医薬品については、保険での償還比率を下げるということももちろんですが、スイッチ化が進むことによって、多くの国民がOTC 医薬品を薬剤師に相談しながら使用することが進むと思います。ただ、ここでも大切なのは、OTC 医薬品を取り揃えて、説明して販売することで終わりではいけないということです。販売後の状態をきちんとフォローして、効果が不十分だった場合や副作用の兆候が見られた場合には、服用の中止と医師への受診勧奨を行ってこそ、プライマリ・ケアとしての薬剤師やOTC 医薬品が生きるのだと思います。

今やコンビニエンスストアよりも多くなった薬局に、開業医の1.5倍を超える薬剤師が存在し、日夜業務に当たっているというのが現状です。その医療専門職や医療提供施設が、お薬をお渡すために機能するのではなく、患者さんの状態をよくするために機能すれば、日本の地域医療はきっと大きく変わっていくでしょう。